

『東方』二七九号より

繁栄と混乱の中国を演じた女優

——劉曉慶の半生を読む

長谷川 周人（ジャーナリスト）

本書は中国映画界に長く「影皇（映画界の皇帝）」として君臨し、二〇〇二年に巨額脱税容疑で逮捕された大女優、劉曉慶の半生をつづったものである。といっても単なる一女優の伝記ではない。新中国の変遷を体現するかのような劉曉慶の半生は、著者の言葉を借りれば「激動の現代中国をしたたかに生き抜く中国国民の濃密な縮図」である。本書はこれを政治・外交の流れと重ね合わせ、繁栄と混乱を混在させる「現代中国人の実相」に迫ろうとする。

劉曉慶は映画「西太后」や「芙蓉鎮」の主演女優として日本でもなじみが深い。だが、彼女が初来日した一九八〇年代前半の中国といえば、改革・開放路線へとハンドルを切ったものの経済は低迷したまま。党幹部の訪日団ですらホテルで即席メンをすすり、小遣いを貯め込んで日本製の髭剃りやストッキングに目を輝かせた時代だ。「国際派女優」としてはまだ駆け出しだった劉曉慶とて例外ではなく、豊かな日本を目の当たりにして「赤貧の悲哀」を味わったようだ。

本書が明かす秘話によれば、一九八〇年一月の初来日の際、バックに詰め込んだドレスはたった一枚だった。所属する北京映画撮影所から借り受けた代物で、ポツカリと開いた穴は髪の毛や花飾りで覆い隠し、ほころびはバッグで押さえて誤魔化した。給料だって月額四十八元と都市部の

松野仁貞著

『毛沢東を超えたかった女』

四六判・二五六頁・新潮社・一、五七五円



平均月収に毛が生えた程度で、滞在中は空腹と赤面の日々を過ごしたという。

どうやら初来日は「屈辱の連続」となったようだが、著者はその心情を「内心おどおどし通しだった」と書き、文革の影に怯えながら経済の建て直しに動く、あの混沌とした時代の中国人心理を突く。中国初の国際派女優として「影皇」を自負しながらも、「豚肉が食べたい」と周囲に当たり散らすのが楽屋裏の偽らざる素顔だった。この矛盾した情景こそ、八十年代前半における中国人の「実相」ではないかと著者は問いかける。

さらに本書は、時代を七一年の国連加盟まで遡り、中ソ論争を踏まえて電撃的な米中国交正常化を果たし、国際社会に躍り出た中国の外交上の立場を詳述。希望と貧しさの中で揺れ動く劉曉慶の心理描写を交えながら、「内実は四角い鋼鉄の箱の中に豆腐を入れているように不安定だった

た」と、長い権力闘争に疲れ果てた当時の中国社会の実情を表現する。

ただ、言うまでもなく、中国の革命を経験した世代の精神構造とは、一般的な日本人が考えるほど軟弱ではない。

確かにプロレタリア文化大革命後の調整期にあつて、右傾化からの引き戻しで党の「精神汚染」批判運動が吹き荒れる中、台湾の人気歌手、テレサ・テンこと鄧麗君の歌が「退廃的」とやり玉に挙げられた時代だ。一党独裁の元では政治と芸能は不可分の領域にあり、「国際派女優」の劉曉慶も対外宣伝工作こそ党に与えられた使命。まして外国人との接触が厳しく制限されたご時世でもあり、日本滞在中も国の看板を背負う劉曉慶には、当局の目と耳がついて回る窮屈な立場だったというのは想像に難くない。

しかし、見方を変えれば、外遊が許可されるのは党の信頼を得た限られた一部の人々だ。劉曉慶は解放軍の活劇団出身の女優として、為政者の側に立つ「特別な地位」にあつたと言える。現に劉曉慶は初訪日の後、鄧小平の「最高指示」の元で官製の言論機関である中国作家協会のメンバーとなり、八八年には中国政治協商会議全国委員に選出されている。

絶対的な大衆支持を得て、カリスマ的な存在となつた劉曉慶を利用しようとする党の思惑が見え隠れするが、貧困からの脱却を夢見る劉曉慶は、与えられた庭の中で、したたかに生き抜こうとしたにすぎない。言い換えれば、劉曉慶は時勢の風向きを嗅ぎ分けながら、改革開放という新たな潮流に乗り、時代の大舞台で主演女優を演じようとしたのだ。

「中国には二人の神がいる。一人は毛沢東。もう一人は私、劉曉慶」——。傲然とこう言い放つ劉曉慶。気丈な中

▶ トップページにもどる

国女性らしい、なんとも気宇壮大なセリフではないか。

さて、こう書いてくると、評者ならずとも中国に関心を持つ者なら、やはり「あの女性」が頭に浮かぶのではない。少女時代の貧困と逆境の中で蓄積したコンプレックスにも似た闘争心。恋を重ねた末、上海に女優としての活動の場を求めるが「浮気女」と相手にされない。だが一人の男との出会いで人生が一変する。延安で毛沢東に見初められ、権力中枢・中南海という大舞台に立つ江青である。

毛沢東は当初、江青には政治活動を許さず、江青はいわゆる生活秘書にすぎなかった。だがそこは惚れた弱み。毛沢東は、文芸界から活動空間を広げる江青に政治活動を徐々に許していくことになる。

印籠を渡されたと信じて疑わない江青らは勢いづき、文革期、内政は混乱の度合いを深めていった。しかし、江青の否定は自己否定に直結するため、毛沢東もむやみに切り捨てることは出来なかった。この狭間で晩年の毛沢東はジレンマに陥るが、ついに力尽き、時代の幕引きは次世代に委ねた、と中国の歴史家は口をそろえる。

四人組批判で責任の分散を図り、毛沢東の傷口は最小限にとどめる。混乱に終止符を打ち、一刻も早く国家再建を目指す。背後にはこうした時代の判断があるが、はたして江青自身はこれをどう見たのだろうか。

「私はすべて毛主席の指示に従ってやったんだ。私への非難は毛主席を非難するのに等しい」。四人組裁判で抗弁を振るう江青の横顔は今も脳裏に焼き付くが、あの毅然とした態度は演技なのだろうか。自らを正当化するため、「毛沢東夫人」という特別な地位を、最後まで利用しようとしただけなのだろうか。

真相の究明は後世の検証に委ねざるを得ないが、江青ら

極左派の初期目標は毛沢東が掲げた「継続革命」を貫くことにあった。本書も江青を「現代中国で女性の第一人者」と位置付けて劉曉慶と比較するが、二人とも自分こそ与えられた舞台を舞う主演女優と信じて疑わなかった。江青が毛主席夫人という特殊地位を利用したのなら、劉曉慶は鄧小平の「先富論」を盾に実業界に打って出て、総資産九千万ドルという「億万富姐」（女性億万長者）の名を欲しいままにしたに過ぎない。少なくとも当人はそう思い込んでいた。

余談ながら、ある中国の税務当局関係者に言わせれば、納税義務が生じた時、まず脱税の抜け道を考えるのが中国人という。米誌『フォーブス』の資産家ランキングに中国の富豪五十人が入って話題を呼んだが、このうち所得税を支払っていたのは四人だけだった。

となると徴税の矛先は外資に向くわけだが、「フランス、アメリカの友人は屁理屈をごねて手強い」そうだ。ちなみに日系企業はと言えば、「トラブル化を恐れてか、自ら納税方法まで伺いを立てる優良納税者」だとか。お褒めの言葉をいただいたが、なんとも複雑な心境である。

いずれにせよ、こんな風潮が蔓延しているから、劉曉慶にすれば脱税容疑で逮捕されるなど全く青天の霹靂。江青と同様、「既定路線」上にありながら「なぜこの私が……」という思いとともに、頂点にあった自分を一罰百戒の血祭りに上げた当局の仕打ちがさぞ恨めしかったに違いない。

党機関紙・『人民日報』は二〇〇二年末、当年の十大経済ニュースの中で、脱税疑惑で逮捕された劉曉慶の事件を第六位に据えた。それは脱税に走る一部の富裕層に対する警告を意味し、世界貿易機関（WTO）加盟を果たした中国が税収監視体制の強化を内外に印象づける狙いがあるう。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

しかし、予想に反して劉曉慶は逮捕から一年あまりで保釈され、経済事件を専門に扱う大弁護士を結成。国家賠償も視野に徹底抗戦する構えを見せていると伝えられる。どんな逆境にあつても食い下がる中国女性のしたたかさを見る思いだが、人治から法治国家への移行を喧伝する中国当局には、経済事件も法的手順に従って処分するというポーズを内外に示す好機と言えよう。

保釈されて北京郊外の自宅で息を潜める劉曉慶自身も、走り出した胡錦濤指導部の采配ぶりを見極めながら、「次の舞台」を虎視眈々と狙っているに違いない。「私は誰にも負けない」――。本書は劉曉慶が北京の収監先から発したこんなメッセージを紹介しているが、彼女の思いはまさにこの一言に集約されているのではないか。

実は著者は、自身でも語っているように、国際報道の現場に立つ経験は持っているが、中国問題の専門家ではない。しかし、文献を参照する際も一次資料である中国語資料に当たるなど徹底し、その上でジャーナリスティックな情報収集力と構成力、そして分析力を発揮する。

文章展開のテンポのよさも特筆すべきだが、経済成長を遂げながらも格差問題など多くの矛盾を抱える「中国社会の今」をえぐり、劉曉慶という大女優の生身の半生を通じて、「中国人の実相」をあぶり出そうという著者の着眼点には脱帽する。大胆な発想と緻密な作業の積み重ねに敬意を表したい。